



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	視覚に障害のある人となない人がともにおこなうバードリスニング：多感覚の体験が生まれる野鳥観察会
Author(s)	島, 絵里子; 樋口, 公平; 仰木, 裕嗣
Citation	自然教育園報告, 58, 33-45
Issue Date	2026
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99543
Type	journal article
File Information	99543.pdf



視覚に障害のある人となない人がともにおこなうバードリスニング： 多感覚の体験が生まれる野鳥観察会

島絵里子^{1,*}・樋口公平²・仰木裕嗣³

¹北海道大学大学院, ²太平電機株式会社・日本野鳥の会, ³慶應義塾大学

Eriko Shima¹, Kohei Higuchi², Yuji Ohgi³: Shared Bird Listening: Multisensory Birdwatching Experiences with Visually Impaired and Sighted Participants. *Miscellaneous Reports of the Institute for Nature Study* (58): 33–45, 2026.

¹ Hokkaido University, ² Taihei Electric Co., Ltd.・Wild Bird Society of Japan, ³ Keio University

はじめに

気候変動や生物多様性の減少、人々の生活における教育、ジェンダーや孤独の問題など、多岐にわたる問題が山積している。2015年9月の国連総会で、国際目標SDGs（Sustainable Development Goals）が、当時の国連全加盟国193ヶ国の賛同により採択された（蟹江2020）。SDGsには17の目標（Goals）と169のターゲット（targets）がある¹⁾。目標の中には、3すべての人に健康と福祉を、4質の高い教育をみんなに、10人や国の不平等をなくそう、14海の豊かさを守ろう、15陸の豊かさを守ろう、16平和と公正をすべての人に、17パートナーシップで目標を達成しよう、が含まれ、また、SDGs（持続可能な開発目標）が明記されている公式文書「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」（Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development²⁾）には、「誰一人取り残さない」（no one will be left behind）という文言が繰り返し登場し、それが重要な理念であることが推察される。

SDGsの推進における博物館の役割の重要性も指摘されている（e.g. 佐久間 2020, 2021）。国際博物館会議ICOMには、博物館と持続可能性に関する国際委員会ICOM SUSTAINが組織され、前述の「2030アジェンダ」が掲げる5つのP（People, Planet, Prosperity, Peace, Partnership）に基づき、ICOMおよびその会員組織全体

における既存の取り組みを支援するとともに、持続可能な開発のための新たな先駆的活動を促進している³⁾。

日本国内においては、「自然観察から始まる自然保護」の理念に基づく自然観察会である「ネイチャ・フィーリング」が、日本自然保護協会（以下、NACS-J）によって、1988年から継続的に開催されてきた（鳥山2021a）。「障害者の権利に関する条約」（2006年国連総会で可決、2013年日本批准）、それに基づく国内法である「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）、そして、SDGsのキーワード「誰一人取り残さない」は、“誰もが参加できる”ことを全ての社会活動に求めている（鳥山 2021a）。また、自然観察会を長年にわたって開催してきた元平塚市博物館館長の浜口哲一（1947～2010）は、「自然は人を育てる」、「自然の中での多様な動植物の姿とふれることは、ものの見方や発想の多様さにつながってくるだろう」と指摘したほか、自然観察を楽しめるものにしていくには視覚以外の五感を活用することが欠かせないと述べた（浜口 2006）。たとえば、鳴く虫の声を聞くなどの聴覚の活用、植物の匂いを観察するなど嗅覚の活用、コナラとクヌギの木肌の違いの観察や、アカガエルやカエルの卵塊のゼリー状の感触などを体験する触覚の活用、サクラの葉などにある蜜腺をなめて甘さを確かめたりするなどの味覚の活用を提案している（浜口 2006）。

植物園における多感覚の体験の重要性や可能性は、国内外で指摘されている。Steinwald *et al.* (2014) は、シ

* E-mail: shima.eriko.m6@elms.hokudai.ac.jp

カゴ植物園やニューヨーク植物園などの事例紹介とともに、自然との多感覚的な関わりの重要性を指摘した。高知県立牧野植物園に所属していた小山・横山（1999）は、植物園において植物は見る対象物であるという当時の現状をふまえたうえで、特別な匂いのある植物や、手で触れられる植物の展示を提案し、「視覚障害者の植物園」について論考をすすめた。その後、高知県立牧野植物園では、植物を直接手に取って感触を確かめたり、ちぎって匂いを嗅いだりできる植栽エリアの整備が決まり、嗅覚ゾーンや触覚ゾーン等のゾーニングが検討され、2019年に「ふむふむ広場」がつくられた（白土 2024）。前述のネイチュア・フィーリングでは、「視覚以外の感覚を目覚めさせる」として、手でみる・全身で感じる・におい・音の観察を提案している（鳥山 2021b）。

Eardley *et al.* (2016) は、先行研究において、さわること、触覚が、視覚に障害のある人の視覚的なギャップを埋めることに使われてきたことに言及したうえで、多感覚による刺激は知覚及び記憶の両方のタスクパフォーマンスを向上させることがこれまでの研究で示されており、触覚やその他の感覚を、障害のある人のためのアクセス領域に限定するのではなく、博物館体験の主流へと取り入れるべきだと主張した。そして、多感覚による情報提供は、すべての来館者の学習機会を向上させる可能性がある」と述べた（Eardley *et al.* 2016）。一方で、博物館（植物園を含む）における来館者の多感覚の体験について詳細に調べた研究は、まだ少ない。聞く・さわる・嗅ぐ・全身で感じるなどの観察を、視覚に障害のある人となない人がともにおこなうことで、どのような会話が生まれ、そして、どのような体験として記憶されるのだろうか。

本稿においては、視覚に障害のある人となない人が、ともに鳥の鳴き声を聞き、植物等をさわったりにおいを嗅いだりして観察する機会を、博物館附属園という場でつくりだし、そこでの感想を事後アンケートでたずねた取り組みを報告する。

バードリスニング会の実施

1. 実施場所：国立科学博物館附属自然教育園

国立科学博物館附属自然教育園（以下、自然教育園）園内には、コナラ・ケヤキ・ミズキなどの落葉樹、スダジイ・カシ類・マツ類などの常緑樹が広がり、ススキやヨシの草はら、池や小川などがある（図 1）。このような

自然を活かした植物園が整備されており、四季にわたって様々な草花や、昆虫などの生きものを身近に観察することができる。旧武蔵野の自然景観を保つとともに、その生態系の学術的価値と、土塁・館跡などの史跡の歴史的意義から、1949 年 4 月 12 日に「旧白金御料地」として、国の天然記念物及び史跡に指定された⁴⁾。さらに、将来にわたって、自然教育園の貴重な自然及び歴史遺産を適切に保存・活用し、次世代に継承していくため、中長期的な園の活動の指針として「保存活用計画」を策定し、この保存活用計画に基づき、活動に取り組んでいる⁴⁾。このため、園内では車や自転車の通行はなく、また、ジョギングやスポーツなども禁止されている⁵⁾。

視覚に障害のある人とのバードリスニング会の企画にあたって、車や自転車、また、足場の悪い山道などに気を使わずに安心して観察に集中できる場所を探し⁶⁾、自然教育園で開催することとした。開催時期については、スズメバチ類の非活動期である冬におこなうこととした。

2. 事前の準備

事前の準備として、2025 年 5 月に 1 回、2026 年 1 月に 1 回の、計 2 回、自然教育園で下見をおこなった。

2025 年 5 月の下見では、園内全体を歩き、園路や植生、園内にあるさわれる植物やにおいのする植物などを中心に確認した。下見は約 1 時間かけておこなった。

2026 年 1 月の下見では、バードリスニング会当日に歩く予定のルートを重点的に確認した。下見は約 2 時間かけておこなった。教育管理棟から出発し、路傍植物園を通り、「物語の松」の脇を通って、ひょうたん池へ向かった。その後、水生植物園に行き、湿地を観察してから、もと来た道を戻った。下見見学时に姿を確認した鳥類は、ハシブトガラス、ヒヨドリ、ツグミ、ワカケホンセイインコ、カルガモ、スズガモであった。下見後、著者らでふりかえりをおこない、実施当日は、鳥類の鳴き声を聞くだけでなく、植物の実や葉をさわる時間をしっかり確保すること、参加者を急がせないこと、参加者の観察の時間やペースを最優先にして観察ルートは柔軟に変更すること⁷⁾、『さわる図鑑 鳥』（日本野鳥の会 1991）や、さわれる実物の羽根を持参することを確認した。『さわる図鑑 鳥』には、鳥類の姿・形がカラーで描かれており、その輪郭が透明の UV 加工で盛り上がり、さわれるようになっている。さらに、その姿・形の特徴が、4 行程度の拡大墨字と 6 行程度の点字で紹介されている。

1 月の下見の際に特に懸案事項となったのが、ひょう

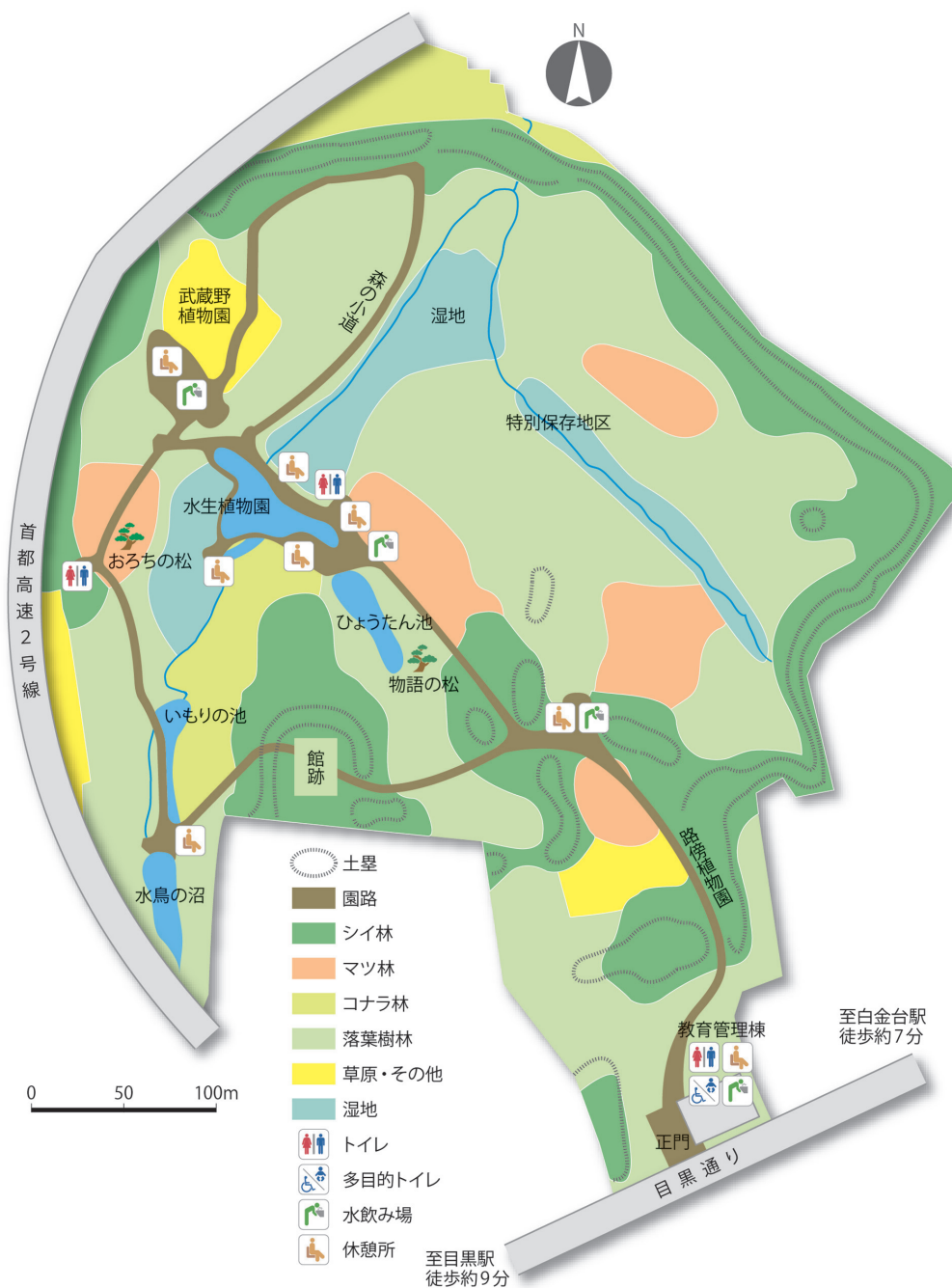


図 1. 国立科学博物館附属自然教育園 園内マップ (提供：自然教育園).

たん池で観察したカモ類の存在を、参加者にどのように伝えるかということだった。下見時、カルガモとスズガモがいたが、どちらも動きは少なく、水面をすすむ音もほとんど聞こえなかった。目には見えるが、音は少なく、池の奥のほうにいて気配も感じられにくいカモ類の存在を、どうやって、視覚に障害のある参加者に伝えるのか。一緒に観察するにはどのようにしたらいいのか。下見時には、とにかく、その様子を丁寧に言葉で描写することを、著者らで確認した。

3. 実施当日

実施当日の動きについて、時間と場所に沿って、内容と観察した生き物などを表1にまとめた。鳥類の鳴き声としては、ハシブトガラス、ワカケホンセイインコ、ヒヨドリ、メジロ、ホオジロ、ウグイスを聞いた(図2)。そのうち、姿も確認したのは、ハシブトガラス、ワカケホンセイインコ、ヒヨドリ、メジロであった。また、ツグミは、鳴き声を聞くことはできなかったが、その姿は確認した。さらに、そのときツグミが食べていたイイギ

表 1. バードリスニング当日の活動内容, 観察した生き物, 使用したもの.

時間	場所	活動内容	観察した生き物	使用したもの
10:00	JR目黒駅	全員がそろってから移動開始。		
10:15	自然教育園入口	自然教育園に到着。受付, 入園。		
	教育管理棟横の テーブル (外)	[導入] ○全員で自己紹介 ○今日の全体の動き (予定) を説明 ・今日は, 鳥の鳴き声や羽の音など, 「音」に注目して歩いていく。 ・木の上のほう, 真ん中あたり, 下のほうなど, 色々なところから鳥の鳴き声が聞こえてくる。 ○静かにして, 何が聞こえるか, 耳を傾ける。 ・ヒヨドリの鳴き声, ワカケホンセイインコの鳴き声が聞こえてくる。 ・「さわる図鑑 鳥」ヒヨドリ (p.8) にさわって, 姿と形を確認。	ヒヨドリ Brown-eared bulbul (<i>Hypsipetas amaurotis</i>) ワカケホンセイインコ Ring-necked parakeet (<i>Psittacula krameri manillensis</i>)	さわる図鑑 鳥 (ヒヨドリ)
10:30		[出発]		
10:31	路傍植物園の 手前	○ハシブトガラスの鳴き声が聞こえる。 ・鳴き声に耳を澄ませる。 ・聞こえている鳴き声は, ハシブトガラス? ハシボンガラス? (解説) ・「さわる図鑑 鳥」ハシブトガラス (p.7) にさわって, 姿と形を確認。 ○鳥はどうやって空を飛ぶのだろう? ・持参したハシブトガラスの風切羽を, 参加者にさわってもらおう。 ・風切羽を上から下にうちおろして, そのときに生まれる風を感じてもらおう。	ハシブトガラス Large brilled crow (<i>Corvus macrorhynchos</i>)	さわる図鑑 鳥 (ハシブトガラス) ハシブトガラスの風切羽 (第二著者が持参したもの)
		[歩く]		
10:43	路傍植物園	○マンリョウの実と葉にさわる。 ・ヒヨドリの鳴き声が聞こえる。 ・ヒヨドリもメジロも, マンリョウの実を食べる (解説)。	マンリョウ (<i>Ardisia crenata</i> Sims) ヒヨドリ Brown-eared bulbul (<i>Hypsipetas amaurotis</i>)	
		[歩く]		
10:49	路傍植物園	○センリョウの実と葉にさわる。 ・先ほどさわったマンリョウとの相違点は? (解説)	センリョウ (<i>Sarcandra glabra</i> (Thunb.) Nakai)	
10:53	路傍植物園	○イイギリの木の近くで, ヒヨドリとツグミの鳴き声に耳を傾ける。 ・ヒヨドリの数が多く, 鳴き声も多く聞こえる。 ・一方で, ツグミは3羽いるが, 鳴き声は聞こえない。 ・「さわる図鑑 鳥」ツグミ (p.19) にさわって, 姿と形を確認。 ・第二著者が持参したツグミの実物の羽根1枚にさわる (解説)。	ヒヨドリ Brown-eared bulbul (<i>Hypsipetas amaurotis</i>) ツグミ Naumann's thrush (<i>Turdus naumanni</i>)	さわる図鑑 鳥 (ツグミ) ツグミの羽根 (第二著者が持参したもの)
10:57		○さらに, ワカケホンセイインコが20羽くらい来た。 ○解説 ・ワカケホンセイインコについて ・ツグミについて ・夏鳥・冬鳥・留鳥について ・イイギリについて ・野鳥調査における鳥の探し方 (鳴き声からどこにいるかを探す方法) について	ワカケホンセイインコ Ring-necked parakeet (<i>Psittacula krameri manillensis</i>)	
		[歩く]		
11:03	路傍植物園	○メジロの鳴き声が聞こえる。 ○カラスザンショウの木で, ワカケホンセイインコが, カラスザンショウの実を食べている。 ・カラスザンショウの実について解説。 地面に落ちているカラスザンショウの実を拾い, 第二著者が持参した10円玉で実をはさんで割る→実のにおいをかぐ。	メジロ Japanese white-eye (<i>Zosterops japonicus</i>) カラスザンショウ (<i>Zanthoxylum ailanthoides</i> Siebold et Zucc. var. <i>ailanthoides</i>)	

時間	場所	活動内容	観察した生き物	使用したもの
11:08		○メジロもカラスザンショウの木にきた。 ・「さわる図鑑 鳥」メジロ (p.11) にさわり、姿と形を確認。 ・メジロの重さ 11g を実感する：10円玉2枚と1円玉2枚を手のひらにのせて、その重さ（メジロと同じ重さ）を感じる。 ・メジロが小さい体サイズであることの利点とは（解説）。	メジロ Japanese white-eye (<i>Zosterops japonicus</i>)	さわる図鑑 鳥（メジロ） 10円玉2枚と1円玉2枚
		[歩く・移動]		
11:12	路傍植物園	○ウグイスの鳴き声が聞こえる。 ・ウグイスの鳴き声（地鳴き）に耳を傾ける。 ・「地鳴き」と「さえずり」について（解説） ・「さわる図鑑 鳥」ウグイス (p.15) にさわり、姿と形を確認。 ・ウグイスの生態について（解説）。	ウグイス Japanese bush warbler (<i>Cettia diphone</i>)	さわる図鑑 鳥（ウグイス）
11:19		○メジロの鳴き声が聞こえる。 ・メジロの鳴き声（地鳴き）に耳を傾ける。 ・メジロの地鳴きとさえずりについて（解説）。 ・鳥の鳴き声の「聞きなし」について（解説）。 ・鳴き声図鑑を紹介。	メジロ Japanese white-eye (<i>Zosterops japonicus</i>)	
		[歩く・移動]		
11:24	路傍植物園	○ヤツデの葉と実にさわる。 ・ヒヨドリやメジロなどがヤツデの実を食べる（解説）。 ・ヤツデの名の由来について（解説）。 ・参加者からの質問：鳥がヤツデの実を食べたとき、ヤツデの茎は折れてしまわないの？→メジロの体が小さい・軽いことで、ヤツデが折れずに実を食べられる（解説）。	ヤツデ (<i>Fatsia japonica</i> (Thunb.) Decne. et Planch.)	
		[歩く・移動]		
11:29	路傍植物園	○園路すぐ脇にあるイイギリの木を観察。 ・イイギリの実がたくさん落ちている。 ・先ほど観察したメジロやヒヨドリ、ツグミが食べていたのもイイギリの実。 ・地面に落ちているイイギリの実をひろい、つぶして、においをかいでみる。実のなかの小さな種も観察。 ○ツグミを観察 ・イイギリの木にツグミが10羽ほど来ている。 ・静かにして、ツグミの羽音に耳を傾ける。ツグミの鳴き声は聞こえない。ヒヨドリの鳴き声が聞こえる。 ・ツグミがイイギリの実を食べる際に引っかかったイイギリの房や実が地面に落下する音も聞こえる。	イイギリ (<i>Idesia polycarpa</i> Maxim.) ツグミ Naumann's thrush (<i>Turdus naumanni</i>)	
11:36		○シロハラの鳴き声（地鳴き）が聞こえる。	シロハラ Pale thrush (<i>Turdus pallidus</i>)	
		[歩く・移動。来た道に戻って、教育棟の脇へ。]		
11:43～ 12:00	教育管理棟横の テーブル（外）	ふりかえり		

りの実で、地面に落下したものを観察した。植物では、マンリョウとセンリョウの葉と実（図3）、カラスザンショウの実（園路に落ちていたもの、図4）、前述のイイギリの実（園路に落ちていたもの、図5）、ヤツデの葉と実を、さわったりにおいを嗅いだりして観察した。観察し

た鳥類のうち、「さわる図鑑 鳥」に掲載されているハシブトガラス、ヒヨドリ、メジロ、ウグイス、ツグミについては、その場で「さわる図鑑 鳥」をひろげて、その鳥の姿・形を、参加者にさわって確認してもらった。
ウグイスの鳴き声（チャッチャッチャッチャッ）が聞



図2. ウグイスの鳴き声（地鳴き）に耳を傾ける。



図4. カラスザンショウの実（落ちていたもの）のにおいを嗅いで観察する。



図3. マンリョウの葉と実にさわる。



図5. イイギリの実（落ちていたもの）を割って、中のたねを観察する。

こえた際には、それが「地鳴き」であることを説明した。ホーホケキョはウグイスのさえずりで、この時期には聞くことができないことや、ウグイスのオスがさえずりの鳴き声をだすこと、ウグイスのメスはさえずりの鳴き声を出さないことなどを解説した。メジロの鳴き声が聞こえた際にも、それが地鳴きであることや、メジロの地鳴きとさえずりについてなどを解説した。

下見時に予定していたルート（路傍植物園―物語の松―ひょうたん池―水生植物園）のうち、当日、実際に歩いたのは路傍植物園から物語の松の手前までであった。下見時に懸案となっていた、カモ類を観察した「ひょうたん池」には当日はたどり着かず、その手前のイイギリの木のある地点が、バードリスニング会の折り返し地点となった。

4. 実施後

①当日記録（日記形式）の送付

バードリスニング会実施当日に第二著者に装着したICレコードの記録をもとに、聞こえた鳥の鳴き声の再確認および文字起こしをおこない、それをもとに、当日の記録を作成した。

当日の記録作成にあたっては、参加者に送付することを前提に、その記録を音声で読み上げたときに聞きやすく親しみやすいものになるよう、日記形式で作成した。視覚に障害のある人の多くは、テキストデータを、パソコンの読み上げソフトやスマートフォンの読み上げアプリなどを使って音声で聞いている。そこで、音声として聞いたときに、かたくなることなく、当日のことを思い出すことができるような記録を目指した。また、参加者に送付するデータファイルは、ワードファイルとPDFファイルの両方のファイル形式を用意した。これは、PDF

ファイルの場合、読み上げが困難な場合があることが報告されているからである。そして、参加者一人ひとりにファイルをeメールに添付して送信した。

当日の記録の一部を、以下に記載する。

さて、イイギリの木を離れて進み始めると、チリリリリイという鳴き声が聞こえました。これは、メジロの鳴き声でした。

さらに歩いていくと、カラスザンショウの木に出合いました。青空に向かって、カラスザンショウの枝が、ほうきの先のように広がっています。葉はもう落葉していて、枝には黒色のカラスザンショウの実がたくさんついていました。ここには、ワカケホンセイインコが来て、実を食べていました。ワカケホンセイインコは、真緑色の羽根のインコで、全長は約40cmです。

カラスザンショウの木の根元には、その実が落ちていたので、拾って、さわって観察しました。さらに、樋口さんが、10円玉2枚を取り出し、その2枚でカラスザンショウの実を1つはさんで、割ってくれました。そのにおいをかいでみます。実を割るときには、「こんなに硬いんだ!」という声が、参加者の方からあがりました。

実のにおいを嗅いでいると、メジロがカラスザンショウの木にやってきました。メジロの全長は約12cm、重さは約11g。11gがどれくらいか、私たちが手のひらにのせて感じるができるように、樋口さんが、10円玉2枚と1円玉2枚を差し出してくれました。10円玉は1枚4.5g。1円玉は1枚1g。なので、22円で、ちょうど11gです。さわる図鑑でも、メジロの姿・形をさわりました。

②アンケート調査の実施：アンケートフォームの送付

バードリスニング会実施から1週間後に、参加者全員にアンケートフォームURLをeメールで送り、アンケートへの回答を依頼した。回答期間は13日間とした。アンケート項目は以下のとおりである。

(1) バードリスニング会の感想をおしえてください。(自由記述)

(2)－1 特に印象に残っているものを、以下から3つ選んで、チェック☑をしてください。

・ヒヨドリの鳴き声、羽音

・ワカケホンセイインコの鳴き声、羽音

・さわる図鑑 鳥

・ハシブトガラスの鳴き声、羽音

・ハシブトガラスの風切羽(第二著者の持参したもの)

・マンリョウとセンリョウの葉と実

・イイギリの実

・ツグミの羽音、鳴き声

・ツグミの羽根(第二著者の持参したもの)

・メジロの鳴き声、羽音

・メジロの重さと同じ22円(10円玉2枚と1円玉2枚)

・カラスザンショウの実

・ウグイスの鳴き声、羽音

・ヤツデの葉と実

・シロハラ(シロハラ)の鳴き声、羽音

(2)－2 上記の3つを選んだ理由を、よろしければおしえてください。(自由記述)

(3) バードリスニング会 参加中に、どのような行動が生まれましたか？あてはまるものすべてに、チェック☑をしてください。

・聞く ・におう・嗅ぐ

・さわる ・見る

・体を動かす(歩く・腕をのばす・かがむ・上を向くなどの、体を動かす行動)

・話す

(4) 次回のバードリスニング会に期待することをおしえてください。(自由記述)

(5) ご自身の見え方(視覚)について、あてはまるもの1つにチェックをしてください。

・全盲 ・ロービジョン

・晴眼(見える) ・そのほか

・回答しない

(6) もしもよろしければ、ご自身の年代について、あてはまるもの1つにチェックをしてください。

・10代 ・20代 ・30代 ・40代

・50代 ・60代 ・70代以上

・回答しない

設問(1)～(5)については必須回答とし、設問(6)については任意回答とした。

③アンケート調査の結果

参加者8名全員から回答を得た。回答は以下のとおりであった。

(1) バードリスニング会の感想

Aさん(全盲, 40代)：

都心に「自然教育園」という素晴らしい施設があることを今回初めて知りました。森の静けさの中に響く鳥の声がとても心地よかったです。今回は冬の森でのリスニングツアーでしたが、異なる季節の鳥の様子についてもさらに知りたいと感じるツアーでした。

Bさん(全盲, 50代)：

普段、自然に接することはあるが、落ち着いて時間をかけて野鳥の鳴き声に耳を傾けることは少なく、とてもよい経験ができました。

Cさん(全盲)：

「都会の冬に聴ける鳥は何かしら？」という期待わくと、「たしか目黒区の鳥はシジュウカラだし、今話題になっているから(話題なのは研究者の方?!)シジュウカラの声を聴けるかな」くらいの予想で参加したリスニング会。シジュウカラは聴こえませんでした。予想以上のヒヨドリとワカケホンセイインコの多さに驚いたり、初めて聴くウグイスの地鳴きとシロハラの地鳴き、そしてカラスザンショウとイイギリの実に初めて触った感触と少しつぶしたときの匂いに感激したり、聴いて、触って、感じて、聴覚以外の感覚も使っているいろいろな体験ができとても楽しかったので、違う季節も味わってみたいと思っています。他の参加者の方からの質問と樋口さん⁸⁾の回答を通して、話題が広がったり、新たな知識を得られたりすることも、このような会に参加する楽しみです。樋口さんのわかりやすい解説に加え、ご用意くださった図鑑・羽・硬貨から、鳥の大きさ・重さ・手触り等、それぞれの鳥の特徴を知ることができて、鳥をより身近に感じました。

樋口さんのお話の中で実は一番感動したのは、野鳥調査に聴覚が大きな役割を果たすというものです。なるほど！と感心しきりです。鳥が地面から何m上にいる、というような距離を測る感覚を私は持ち合わせていませんが、「ウグイスがヒヨドリより低いところで鳴いている！」と耳を澄ましてみることにします。

今回視覚障害者の参加者が少ないなと思ったのですが、観察の合間に羽根を触る、図鑑を見るということをするのであれば時間が掛かるので、今回の人数がちょうど良いのかと思います。私の点字を読む速さに驚かれた方がいらっしゃいましたが、人によって速さは異なり、私の読みは速いです。触読の速い・遅いと、頭の良し悪しとは関係がありません。学習能力があっても点字を読むのが遅い、図形を認知するのが苦手という人はけっこういます。観察会ではそういう指の感覚の違いも考慮する必要があるかな、と思います。

自然教育園を訪れるのが初めてなのか2回目なのか記憶は曖昧なのですが、大名屋敷のおかげで、山手線の駅の近くに多くの野鳥が生きていける環境のあることに感謝したい気持ちです。

Dさん(晴眼, 20代)：

硬貨や羽根などの実物を用いた樋口様の解説が大変興味深く、勉強になった。ツアーの中では、視覚障がい者の方々がヒヨドリやメジロなどの鳥の声に徐々に意識的になられていた姿を拝見し、身近な自然に目を向けることの大切さを改めて認識した。

バードリスニングをもっと日常的なものにし、さらに録音なども交えられれば、新たな鳥類調査の形が可能になるかもしれないと感じた。

Eさん(晴眼, 20代)：

とても濃い内容で、自分も含めた参加者全員が楽しむことができたと感じました。その結果として、1時間ほどの時間を散策しましたが園内全てを回ることはできませんでした。私としては、視覚障害者の方の補助者をしたのですが、色々学びになりました。その方は、鳥を写真におさめたい、木のどのあたりに鳥がいるのか、など様々なことに興味があり私としても伝わるように話すのはとても難しいと感じました。樋口さんの説明があると鳥、食性、植物だけでもとても多くの学びがあり、より興味を持ちました。季節ごとの開催は私も賛成です。ぜひ参加させていただきたいです。

Fさん(晴眼, 30代)：

野鳥が何を食べて暮らしているのか、季節によって姿や行動がどのように変わるのかといったお話を、身近な例を交えてわかりやすく教えていただき、とても印象に残りました。特に、鳥の重さを日常のモノに例えて説明してくださったことで、鳥の存在が一気に身近に感じら

れました。

自然の中で鳥の声に耳を傾ける時間は心地よく、温かく穏やかなひとときを過ごすことができました。

G さん（晴眼・40 代）：

鳥の鳴き声、羽音を聞くという意識するだけでよく耳に入ってくるのがよくわかり楽しかったです。

H さん（晴眼、60 代）：

五感をフルに使い、植物と鳥との関係など理科で習った生態系についても思い出しました。さえずりと地鳴きの区別があることも初めて知りました。あれ以来、自宅でもハシブトガラス以外にもヒヨドリの鳴き声が聞こえてくるようになり「あっ、いる！いる！」とうれしくなります。

(2)－1 特に印象に残っているもの

最も多く選択されたのは、「ウグイスの鳴き声、羽音」が4名（視覚障害2名、晴眼2名）,「メジロの重さと同じ22円（10円玉2枚と1円玉2枚）」が4名（視覚障害1名、晴眼3名）,「さわる図鑑 鳥」が4名（視覚障害1名、晴眼3名）,「マンリョウとセンリョウの葉と実」が4名（晴眼4名）であった。

次に多く選択されたのは、「ハシブトガラスの風切羽（第二著者の持参したもの）」が3名（視覚障害2名、晴眼1名）であった。続いて、「カラスザンショウの実」が2名（視覚障害2名）,「ワカケホンセイインコの鳴き声、羽音」が1名（視覚障害1名）,「ハシブトガラスの

鳴き声、羽音」が1名（晴眼1名）,「ヒヨドリの鳴き声、羽音」が1名（晴眼1名）であった（図6）。

(2)－2 上記の3つを選んだ理由

A さん（全盲、40 代）：さわる図鑑 鳥、ハシブトガラスの風切羽、ウグイスの鳴き声・羽音を選択

鳥の鳴き声だけでなく、実際に触れることができるもの（図鑑・風切羽・鳥が食べる植物）について説明していただき、ツアー全体を通して様々な感覚（聴覚・触覚・嗅覚）を使うことができて楽しむことができてよかった。

B さん（全盲、50 代）：ハシブトガラスの風切羽、メジロの重さと同じ22円（10円玉2枚と1円玉2枚）、カラスザンショウの実を選択

もちろん野鳥の鳴き声は印象に残っていますが、ただ、明確に記憶に残っているかという自信がなく、まだ聞き慣れてないためだと思います。より具体的に手で触れて体験したもののほうが印象に残りました。

C さん（全盲）：ワカケホンセイインコの鳴き声・羽音、カラスザンショウの実、ウグイスの鳴き声・羽音を選択

ワカケホンセイインコの鳴き声とウグイスの地鳴きを聴くのは初めてで、さえずりというより鳴き声だなと感じたワカケホンセイインコの声と、じっじっというのか、じゃっじゃっというのか、昆虫みたいなウグイスの地鳴きが印象にのこりました。身体が大きい分、声も大きいワカケホンセイインコの鳴き声は私は嫌いではないです。

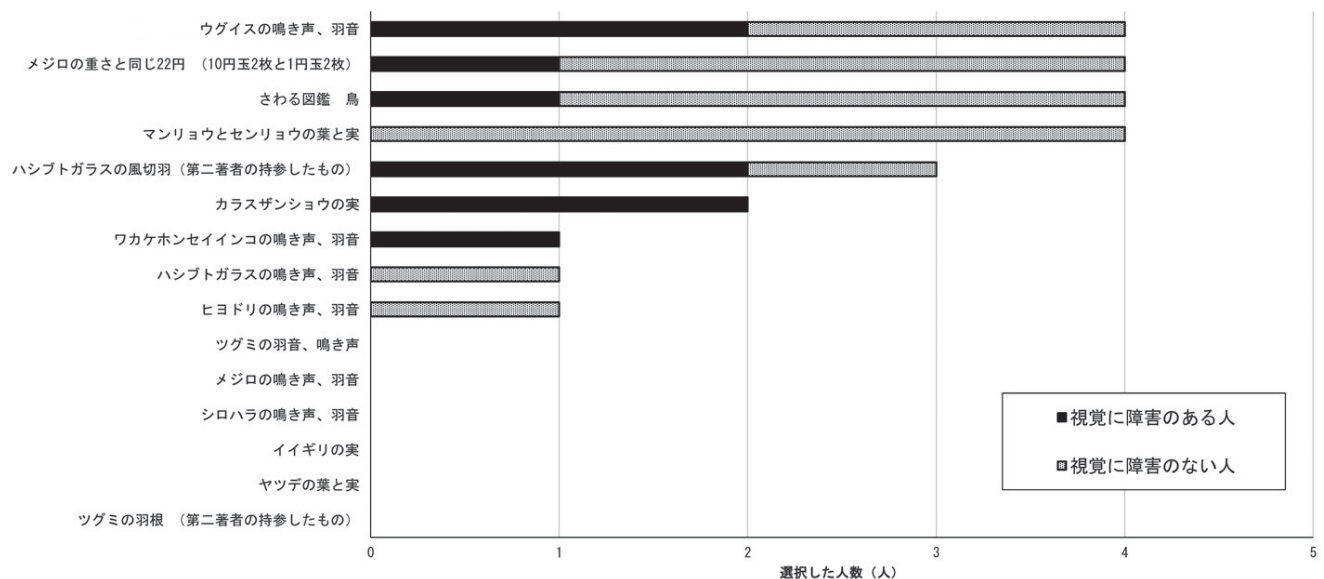


図6. バー ドリスニング会で特に印象に残っているもの（3つを選択）.

Dさん（晴眼，20代）：さわる図鑑 鳥，マンリョウとセンリョウの葉と実，メジロの重さと同じ22円（10円玉2枚と1円玉2枚）を選択

点字を使った鳥の本があることを知らなかったのも、初めて拝見して驚いたため。マンリョウとセンリョウの実のつき方の違いの解説が印象的だったため。鳥の重さを身近なものに例えた説明が分かりやすかったため。

Eさん（晴眼，20代）：さわる図鑑 鳥，マンリョウとセンリョウの葉と実，ウグイスの鳴き声・羽音を選択

鳥が実際に餌にしているものを触ったり、嗅ぐことで理解が深まると思いました。私も勉強になりました。また、「さわる図鑑 鳥」は古いものでしたが、とても有効で新たなものが必要であると感じました。私も実際に作ってみたいと思います。

Fさん（晴眼，30代）：さわる図鑑 鳥，ハシブトガラスの風切羽，メジロの重さと同じ22円（10円玉2枚と1円玉2枚）を選択

バードリスニング会を通して、自然や野鳥に対する見方が大きく変わったと感じたためです。翌日の通勤途中で鳥の声を聞いた際、自然と前日の体験を思い出し、日常の風景が少し豊かに感じられました。また、その体験を目の不自由な職場の先輩に話したところ、駅の中で改札や売店などを示す鳥の鳴き声に共通のルールがあれば、より安心して歩けるのではないかというアイデアにつながり、会話が広がりました。その後、図書館で鳴き声の仕組みに関する電子工作の本を読みました。単なる

体験にとどまらず、人や社会のあり方について考えるきっかけをもらえた点に、大きな価値を感じています。

Gさん（晴眼，40代）：ハシブトガラスの鳴き声・羽音，マンリョウとセンリョウの葉と実，ウグイスの鳴き声・羽音を選択

カラスはよく見かけているのに鳴き声が違うことをはじめて知りました。マンリョウとセンリョウの葉と実も公園に行ったりすると見かけていたけど区別があったことに驚きました。ウグイスの鳴き声はホーホケキョだけだと思っていたけど違う鳴き声もあるということ母にも伝えようと思いました。

Hさん（晴眼，60代）：ヒヨドリの鳴き声・羽音，マンリョウとセンリョウの葉と実，メジロの重さと同じ22円（10円玉2枚と1円玉2枚）を選択

バードリスニング会以降、ヒヨドリの鳴き声が聞こえてくるようになったため。聞こうと思わないと聞こえないものだと実感しました。（マンリョウとセンリョウについては）お正月の花として切り花はよく見ていましたが、地植えをはじめて見ました。（メジロの重さについて）22円＝メジロと身近なお金で重さを説明されると、その軽さが想像でき、忘れません。

(3) バードリスニング会 参加中に生まれた行動 (複数回答可の設問)

「聞く」と「さわる」を参加者8名全員が選択した。次に、7名が選択したのが「話す」（視覚障害は3名全

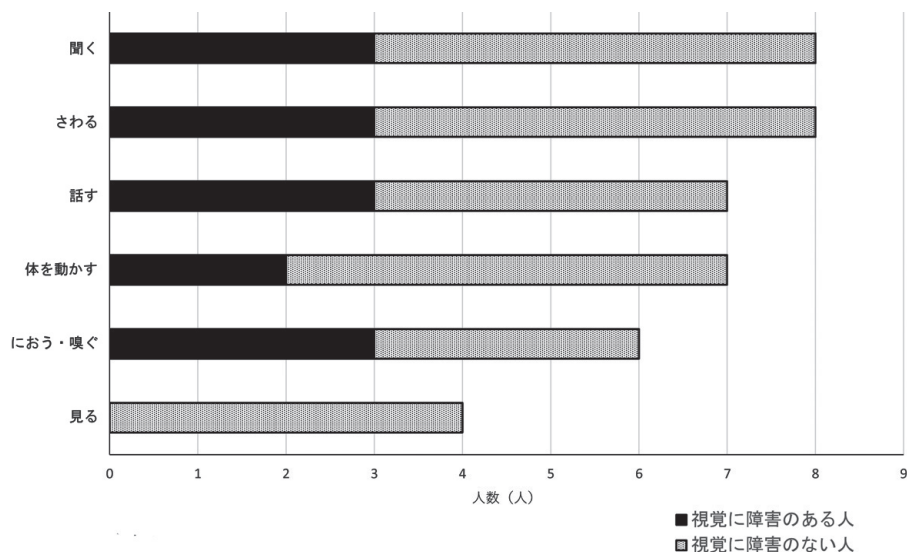


図7. バードリスニング会 参加中にうまれた行動.

員、晴眼は4名)、「体を動かす」(視覚障害2名、晴眼は5名全員)であった。次に、5名が選択したのが「におう・嗅ぐ」(視覚障害は3名全員、晴眼は3名)であった。「見る」は晴眼4名全員が選択した(図7)。

(4) 次回のバードリスニング会に期待すること

Aさん(全盲、40代)：

今回のツアーは、解説者と参加者との距離が近く、鳥類や植物についてその場で疑問を解説者に直接質問できる点が魅力に感じました。季節ごとの鳥の様子を学べるツアーを期待します。

Bさん(全盲、50代)：

今回と同じような内容でよいと思います。繰り返す中で、新しいアイデアが、あちこちから湧き出てくるものと思いますので。

Cさん(全盲)：

水辺の鳥についてのお話をぜひうかがいたいです。季節が変われば今回とは違う植物に触れるでしょうし、その植物を食料とする鳥のこと、次回は昆虫についても聴けるのでしょうか。昆虫、爬虫類、両生類についてはお話だけで十分です、私の場合。

Dさん(晴眼、20代)：

季節や環境などの条件を変えて、継続的に開催していただきたいと感じた。また、鳥の3D模型や録音データなど、様々なコンテンツをさらに複合的に導入できたらもっと面白くなると思う。

Eさん(晴眼、20代)：

その季節でしか見れない鳥、植物も観察、触察してみたいと思いました。また、今回は水辺の観察はできなかったため、その辺も期待したいです。個人的には、観察する前に鳥の模型を作っていければと思います。もちろん、触りながら聞くと言うのが、理想ですが。

Fさん(晴眼、30代)：

次回も、今回のように鳥の声を通して自然とのつながりを感じられる体験を期待しています。あわせて、バードリスニングの体験が、視覚に頼らない環境づくりやユニバーサルデザインとどのように結びついていくのかといったお話も、もう少し聞いてみたいと思いました。日常や社会に活かせる視点を得られる場として、今後もゼ

ひ継続して開催していただけると嬉しいです。

Gさん(晴眼、40代)：

春の鳥たちの鳴き声も聞いてみたいと思いました。これはバードリスニング会に期待することではないですが、バードリスニング後に耳が鳥の鳴き声を聞こうと意識することが多くなりました。そのおかげで野生のワカケホンセイインコを見かけることができました。

Hさん(晴眼、60代)：

季節ごとに企画していただきたいです。

今回のバードリスニング会実施をとおして

バードリスニング会の実施をとおして、「さわる」、「聞く」、「見る」だけでなく、「話す」、「体を動かす」、「におう・嗅ぐ」という行動が参加者にうまれていたことが分かった(図7)。「バードリスニング会で特に印象に残っているもの」をたずねた質問では、聞いた鳥の鳴き声や羽音だけでなく、さわった実や「さわる図鑑」、手のひらにのせて感じた重さが参加者の印象に残っていた(図6)。晴眼者4名のうち、全員が「マンリョウとセンリョウの葉と実」を、また3名が「メジロの重さと同じ22円」、「さわる図鑑 鳥」を選択していた(図6)ことから、晴眼者が、さわる、重さを感じる体験を、特に印象に残ったこととして選択した可能性が考えられる。

自由記述においても、「鳥の鳴き声だけでなく、実際に触れることができるもの(図鑑・風切羽・鳥が食べる植物)について説明していただき、ツアー全体を通して様々な感覚(聴覚・触覚・嗅覚)を使うことができて楽しむことができよかった」(Aさん・全盲)、「より具体的に手で触れて体験したもののほうが印象に残りました」(Bさん・全盲)、「カラスザンショウとイイギリの実に初めて触った感触と少しつぶしたときの匂いに感激したり、聴いて、触って、感じて、聴覚以外の感覚も使っているいろいろな体験ができとても楽しかったので、違う季節も味わってみたい」(Cさん・全盲)、「鳥の重さを日常のモノに例えて説明してくださったことで、鳥の存在が一気に身近に感じられました」(Fさん・晴眼)という感想が寄せられ、様々な感覚をつかった観察が印象に残ったことが感想から読みとれる。

野鳥の鳴き声については、「初めて聴くウグイスの地

鳴きとシロハラの地鳴き」(Cさん・全盲),「さえずりと地鳴きの区別があることも初めて知りました」(Hさん・晴眼),「ウグイスの鳴き声はホーホケキョだけだと思っていただけ違う鳴き声もあるということを母にも伝えようと思いました」(Gさん・晴眼)という感想が寄せられ、鳴き声にはさえずりだけでなく地鳴きがあることを初めて知り、また、ウグイスなどの地鳴きを初めて意識して聞いて、印象に残ったことが読みとれる。さらに、「バードリスニング後に耳が鳥の鳴き声を聞こうと意識することが多くなりました」(Gさん・晴眼)という感想もあり、バードリスニング会の体験の日常へのつながりも期待される。

現代の日常生活において、視覚優位の「見る」行為に偏りがちな中で、今回の、視覚に障害のある人との様々な感覚をもちいたバードリスニング会をとおして、視覚に障害のない人も、触覚や聴覚、そして固有感覚も、普段より活発になった可能性が考えられる。Eardley (2016) による、多感覚による情報提供がすべての来館者の学習機会を向上させる可能性があるという指摘にも合致する可能性がある。触覚の重要性や脱近代を唱える広瀬浩二郎は、「“さわる”ことは視覚障害者だけでなく、見常者⁹⁾にとってもきわめて重要な経験となる」と指摘する(広瀬 2017)。そのように、視覚に障害のある人となない人が一緒に、様々な感覚をもちいて自然を体感し、観察することで、より体験が深まっていく可能性がある。

今後は、このような実践を重ねて、多感覚による観察が、様々な来館者の体験をどのように深めていくのか、探索をすすめていきたい。今回の実践では、会話の記録や事前事後のインタビュー調査等はおこなわなかった。今後は、バードリスニング会における参加者の体験について、質的な調査・分析をおこなうことで、探索をすすめることが求められる。さらに、取り組みを重ねることで、SDGs 2030 アジェンダの「誰一人取り残さない」をはじめ、SDGsの達成目標にどう向き合っていけるか、実践を続けていきたいと考えている。多感覚による観察は、「誰一人取り残さない」という考えや関係性を超えて、誰もがお互いに教え合う、学び合う関係性を生み出す可能性があり、今後も実践を続けていく。

謝 辞

バードリスニング会の実施にあたり、国立科学博物館 附属自然教育園 岩崎誠司氏、下田彰子氏には貴重なご助言をいただいた。厚く御礼申し上げます。

註

- 1) <https://www.un.org/sustainabledevelopment/> 2026年3月14日最終閲覧
- 2) <https://sdgs.un.org/2030agenda> 2026年3月14日最終閲覧
- 3) <https://icom.museum/en/committee/international-committee-on-museums-and-sustainable-development/> 2026年3月14日最終閲覧
- 4) <https://ins.kahaku.go.jp/about/> 2026年3月14日最終閲覧
- 5) <https://ins.kahaku.go.jp/riyou/rules.html> 2026年3月14日最終閲覧
- 6) 浜口 (2006) は、自然観察会にふさわしい場所とコースとしていくつかの点を挙げているが、その中の一つが「自動車が通らず、特別な危険箇所のない安全な場所」である (p.19)。また、鳥山 (2021C) は、ネイチャ・フィーリング自然観察会を計画・運営する際には、足下に気を使わずに安心して観察に集中できる場所を選ぶよう推奨している (p.32)。
- 7) 島・岩崎 (2020) は、盲学校・視覚特別支援学校の生徒向けの学習プログラム企画・試行の際に、職員各自が共通して心に留めておくことをリスト化した。それが、「生徒を急がせない。生徒のペースですすめる」、「触察と対話がキーワード」などであった (p.32)。時間内に全てのコースを見終わらなくても良しとし、時間がない場合は省略するコースをあらかじめ決めて職員間で共有した。今回のバードリスニング会においても、これらを心に留めて実施した。
- 8) 第二著者
- 9) 広瀬は『目に見えない世界を歩く「全盲」のフィールドワーク』(2017)で「見ることを常とする人＝見常者」、さわることを常とする人を「触常者」と呼び「触常者と見常者は、対等な人間関係を築くことができます」と述べている (pp.91-92)。

引用文献

- Eardley, A. F., Mineiro, C., Neves, J. & Ride, P. 2016. Redefining Access: Embracing multimodality, memorability and shared experience in Museums. *Curator: The Museum Journal*, 59 (3) 263-286.
- 浜口哲一. 2006. 自然観察会の進め方. 71pp. HSK. 東京.
- 広瀬浩二郎. 2017. 目に見えない世界を歩く「全盲」のフィールドワーク. 264pp. 平凡社, 東京.
- 蟹江憲史. 2020. SDGs (持続可能な開発目標). 304pp. 中公新書, 東京.
- 小山鐵夫・横山千花. 1999. 視覚障害者の植物園. 平田大二・奥野花代子・田口公則 (編) ユニバーサル・ミュージアムをめざして—視覚障害者と博物館—生命の星・地球博物館開館三周年記念論集. 210pp. 165-170. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 神奈川.
- 日本野鳥の会. 1991. さわる図鑑・鳥 ①庭や公園の野鳥. 24pp. 日本野鳥の会, 東京.
- 佐久間大輔. 2020. 博物館は持続可能性を社会にもたらすか? 博物館研究, 55 別冊: 27-30.
- 佐久間大輔. 2021. アカデミアの一部としての博物館, 社会の中の博物館. 「博物館の未来を考える」刊行会 (編) 博物館の未来を考える. 184pp. 83-92. 中央公論美術出版, 東京.
- 島絵里子, 岩崎誠司. 2020. 盲学校・視覚特別支援学校と連携した学習プログラムの開発・検討—『ミュージアム・タイムトラベラー—太古の地球さがし—』の事例から—. 日本ミュージアム・マネジメント学会研究紀要, 24: 29-37.
- 白土晃一. 2024. こんこん山広場・ふむふむ広場整備の記録—計画・工事・育成管理—. やまとぐさ, 5: 49-60.
- Steinwald, M., Harding, M. A. & Piacentini, R. V. 2014. Multisensory engagement with real nature relevant to real life. Levent, N. & Pascual-Leone A. (eds.) *The Multisensory Museum: Cross-Disciplinary Perspectives on Touch, Sound, Smell, Memory, and Space*. 410pp. 45-60. Rowman & Littlefield, Lanham, Maryland.
- 鳥山由子. 2021a. はじめに. 鳥山由子 (監修) 小林今日子 (編) 日本自然保護協会資料集 第 58 号 多様な個性で広がり五感で深める特別な自然観察会 ネイチャ・フィーリング 実践テキスト. 104pp. [はじめに]. 日本自然保護協会, 東京.
- 鳥山由子. 2021b. 五感を使って自然を観察する. 鳥山由子 (監修) 小林今日子 (編) 日本自然保護協会資料集 第 58 号 多様な個性で広がり五感で深める特別な自然観察会 ネイチャ・フィーリング 実践テキスト. 104pp. 17-30. 日本自然保護協会, 東京.
- 鳥山由子. 2021c. ネイチャ・フィーリング自然観察会の計画と運営. 鳥山由子 (監修) 小林今日子 (編) 日本自然保護協会資料集 第 58 号 多様な個性で広がり五感で深める特別な自然観察会 ネイチャ・フィーリング 実践テキスト. 104pp. 31-42. 日本自然保護協会, 東京.

